

17世紀後半のウィーンイエズス会ドラマ 「MULIER FORTIS – 気丈な婦人・細川ガラシャ」の起源。 ーその音楽と歴史的背景ー



17世紀を中心に栄えたいわゆるバロック音楽、特に劇音楽としてのイタリア・バロックについては、日本では洋楽受容の経緯から、いまだにその重要性への理解が乏しい分野かもしれません。ウィーンのイエズス会ドラマについて、今回取り上げるのは日本と深い関わりのある作品DTÖ第152巻「Mulier Fortis-気丈な貴婦人、細川ガラシャ」です。本作品の起源、特質、歴史的背景、音楽について、イタリアから来日したロマニョーリ教授ウィーンで活躍する新山先生に語って頂きます。

日時：2017年10月10日（火）
13：20～15：10

会場：神戸大学 鶴甲第二キャンパス
C101教室

入場：入場無料

講演者：アンジェラ・ロマニョーリ
新山富美子（講演、通訳）

テオルバ・ラウテ奏者：
ピエトロ・プロッサー

【講演者・奏者紹介】

講演者のアンジェラ・ロマニョーリはパヴィア大学の音楽史の教授。ウィーン大学やプラハなどからも招聘される、現在のイタリア・バロックの第一人者です。ドラゴのオペラなど、劇音楽を発掘研究し、「気丈な婦人」についても2004年にクレモナで復活上演をしています。今回はピエトロ・プロッサー教授のテオルバの演奏を交え、この劇音楽を発掘研究し出版したウィーン在住の音楽学者、新山富美子氏にも講演して頂きます。

【主催】神戸大学大学院人間発達環境学研究科
【お問い合わせ】
大田研究室 misahta@kobe-u.ac.jp

ウィーンイエズス会ドラマ 「MULIER FORTIS - 気丈な貴婦人・細川ガラシャ」について

細川ガラシャの数奇で悲劇的な運命は、様々な作品の中で繰り返し描かれ、現在に至るまで語り継がれています。今回取り上げる「Mulier Fortis - 気丈な貴婦人・細川ガラシャ」は、そうした作品の中でも最初期のものの一つであり、驚くべきことに日本の作品ではないのです。

彼女の死とその物語は、当時のイエズス会宣教師らと共に海を越え、ヨーロッパに伝えられると、栄光ある行為、信仰の手本として広く知れ渡りました。中でもイエズス会と関係の深いハプスブルク家において、細川ガラシャは気高く美しい后妃エレオノーレと重ね合わされ、評されており、今回の劇の誕生へと至ったのです。

当時のウィーンハプスブルク家では、神聖ローマ皇帝の皇帝レオポルドI世が政治のみならず文化芸術にも長けていました。その権威は全ヨーロッパに及び、彼の宮廷で抱えられて活躍した作曲家も多かったのです。くわえて、后妃エレオノーレは美貌、才気、信仰の深さなど、ガラシャの殉教に対する関心とともに、二人を比較対象として描かれたのも興味深い点です。1698年の初演は、后妃の霊名の祝日でした。

講演者のお二人には、この劇の起源や音楽、背景について、また当時のイタリアの作曲家たちについて、ピエトロ・プロッサー氏のテオルバ演奏を交えつつ講演していただきます。

出演者プロフィール

アンジェラ・ロマニョーリ Angela Romagnoli

1962年ローマ生、ミラノのCivica Scuola Musicaで、初期音楽を学び、1992年パヴィア大学音楽学、博士号を授与、音楽学部で講師として演劇の歴史を1994-6、チェコ共和国プラハ、カロリーナ大学でバロックと古典音楽を教授、1998-99、a post doctorate grantで19世紀のハプスブルク統治下のオペラと政治関係についての研究に従事、2001年来クレモナのパヴィア大学音楽学部で「実際上演の歴史」、「バロックと古典音楽の歴史」、「ダンスとダンス音楽の歴史」を教える。傍ら 研究の成果、アントン・ドラーギを初めイタリアバロックの作曲家、その作品の編集出版、実際のモダンな上演法、その実現に従事、2004年にはクレモナFilodrammatici劇場で、シュタウトの“Mulier fortis”を編集者Dr.Fumiko Niiyama-Kalickiと演出家Deda Cristina Colonnaとの協力で上演。続いてイタリアバロックの作品の研究上演、学会を開催しその復興に尽力している。2012・13年ウィーン大学音楽学部で教え、同時にパヴィア大学から教授として迎えられ、「上演実施の歴史」、「劇場の歴史」、「ダンスとダンス音楽の歴史」を教えている。クレモナで音楽祭を主宰、現在に至る。

ピエトロ・プロッサー Pietro Prosser (テオルバ・ラウテ奏者)

1965年Cantu イタリア生、1989年古典ギター、ラウテをパルマ・コンセルヴァトリーウムで卒業、1996年音楽学で博士をパヴィア大学より授与、2001年 S. Cecilia Conservatoriumローマ、ラウテで卒業、Generalbassの専門家としてルネッサンスとバロックの数多くのアンサンブル（Ensemble Zefiro, Akademia Montis Regalis等）で演奏活動。ソリストとしてVenneti, Bozenにおいても活動。また、ハンガリー、チェコ、ウィーンなどで、2007年以来ラウテニストとしてリスボンのBorokorchester Divide。演奏活動の傍らTrentoのコンセルヴァトリーウムで、ラウテを指導。

新山カリツキ富美子 Fumiko Kalicki

東京に生まれ、東京芸術大学音楽学部声楽科卒業後、ハンプルク、ベルリンを経て、1980年以来ウィーンに居住。1993年ウィーン大学、音楽学学部、音楽史と神学学部、カトリック典礼学で、論文“Zu mittelalterlichen Musikleben im Benediktinerinnenstift Nonnberg zu Salzburg”をもって、哲学博士を授与、その分野の研究者として調査研究を続け、IMS, Cantus planusの会員として学会発表、出版、ザルツブルク大学音楽学部、ザルツブルク音楽史の共同研究者として従事、1994-1995年オーストリア国立銀行から助成金をえる。その間に、イエズス会ドラマ・Mulier fortis（細川ガラシャ）を発見2000年にオーストリア音楽記念収大成（Denkmäl der Tonkunst in Österreich）第152巻として編集、Prof. Passと出版、日本各地を始め、USA、で講演、セミナーに招待される。

2004年 パヴィア大学のクレモナ音楽学学部、アンジェラ・ロマニョーリの下、Mulier fortisの初めての再演を補佐、2013年ウィーンイエズス会創設450年記念音楽会に、Mulier fortisから抜粋演奏をする。